



パラダイム転換期の学術情報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金子, 務 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/11561

パラダイム転換期の学術情報

総合情報センター所長 金子 務

いま高等教育環境が大きく変わろうとしている。放送通信衛星のデジタル化の方向が最近明確になったが、地上波のデジタル化も急ピッチで進む動きが出てきた。現在の不安定な衛星放送に頼らなくても急速に世界的に進むデジタル放送技術によって、NHKの地上波2チャンネル分をデジタル化すれば300チャンネル分の放送が可能になるといわれる。そうなれば民放の各チャンネルもデジタル化の流れに乗るであろう。私が客員教授をしている放送大学もこういう動きの中で10年以内に改組されるということを耳にしている。デジタル時代になると、新たに主要大学や大学院大学に設置される多くのスタジオから、さまざまな講義や実習指導の電波が飛び交う時代がくるだろう。国公私立の全大学にとってマルチメディアによる遠隔地教育の日常化は、基盤を揺るがす由々しい事態である。

本学は特徴のある諸学部と優秀な研究陣を抱えているが、それまでに設置者の理解を得て、新たな国レベルの動きに十分対応できる施設と技術、有効な対外的PRの方策を練り上げておく必要があるであろう。幸い新年度からは学内の基幹LANの基本設計費もつく運びとなり、キャンパス・ネットワークの基盤整備は一挙に進むことが約束された。改めてこれまでの関係各位のご努力に深く感謝申し上げる次第である。公立大学としての本学を取り巻く環境はこのところ厳しさを増している。バブル崩壊に伴う経済不況、阪神淡路大震災以降も続く社会不安などが重なり、どの公立大学も大小さまざまな設置母体の財政基盤が弱体化し、大学財政にも少なからぬ影響を与えている。その中で基本設計費のもつ意味はきわめて重いと見なければならぬ。ご存知の平成6年度補正予算によって一挙に100を超える国立大学、大学共同機関にLANが設置されるに至ったことを考えれば、これで遅れている状況がやっと訂正されるというのは正しいが、同時に総合情報センターへの期待はますます高まるであろうから、新所長以下一丸となって一層の充実を図っていかれることを切にお願いしたい。

いうまでもないことだが、情報はハードの整備で事足りるわけではない。情報というものは自在に取り出せかつ組織化されて、初めて知識になるのである。地球的な規模で広がりを見せるインターネットも、学内LANも、飛び交う情報を捉える手段であるから使い方次第である。ただしこれらの手段は、それを動かすためにはそれだけの手続きや知識がまた必要、という複雑な「いれこ」構造になっている。つまり現代では知識も情報も手段であり目的であるという関係図式になっているから、電子的仕掛の重要度がそれだけ高いのである。こういう情報ネットワークからはじきされる人たちを「デジタル・ホームレス」と呼ぶ向きもあるそうだが、まことに困った言葉である。幸い本学では新年度から一般情報処理教育がスタートする。情報システム関係者は、今後も未来ある学生たちに、十分な知識獲得の機会を広げていってもらいたいものである。

関西圏の図書館情報環境もいま大きく変わりつつある。昨春と昨秋オープンした大阪府立中央図書館と大阪市学術情報総合センター、それに実現に向かい始めた第2国会図書館構想が加わる。本学総合情報センターも、4年前に旧中央図書館、計算センターを合体させ、さらにホール機能を付加して発足し、今日の電子学術情報環境に対応できる先端的な

組織になっているが、ネットワークの整備とともに情報の蓄積、組織化、利用・提供両面の機能整備など、日常の運用面でなお一層の自己点検の必要にも迫られている。

いまわが国でもっとも進んでいる電子図書館システムをもつという、奈良先端科学技術大学院大学のそれを最近見学した。ここでは企業からの委託学生を含めて情報とバイオ分野で大学院生700人、ネットワークでつながったワークステーションが2000台あり、研究室や自宅から24時間アクセスできるデジタル・システムが稼働している。理工系とあって本よりもジャーナルが重視され、この2月現在で120タイトル、A4判で約15万ページを収録しているという。入手後2、3日でオン・ラインしているというから、ほぼリアル・タイムで提供しているといつてよいだろう。ビデオも圧縮してデジタル化しており、しかも従来の検索機能に加えて本文中の主要単語をキーワードとする全文検索機能を提供し、また利用者があらかじめ登録した関心領域の書籍や雑誌の入手を遅滞なくネットワークを通して知らせるアラーム機能もついている。

こう見るとよいこと尽くめのようだが、いろいろ問題があるようだ。メディアセンターの電子化の作業を見ると、新着雑誌は背を裁断してページにばらしイメージとして読み込んでおり、その後不要な広告等の部分を削除している。本はまるごと自動複写する装置を試験的に稼働している。雑誌をばらす行為を容認できるとしても、文系で扱う古書の類はまずこの装置では扱えないであろう。本は、文系の立場でいえば、単なる情報の集積ではなく、装丁も紙質もインクの香りもある手ごたえを感じさせる文化の結晶体なのである。著作権問題もまた大きく立ちはだかっている。現在の著作権法では、文献複写はある程度認められているにしても、デジタル化する複製権、ネットワークにのせる有線放送権、端末プリンターによる印刷権は容認されていない。そこでここでは内外の著作権者と利用範囲や金銭面での折り合いをいちいち付けて試行的にサービス提供しているというのが実状のようだ。条件面での応答も外国出版社にくらべ国内出版社の多くは準備もできていないといわれる。

いま世界的に見ると、電子図書館問題をめぐって集中化と分散化という二極の動きが鮮明になっている。アメリカでは議会図書館が、イギリスでは高等教育財政協議会の統合情報システム委員会（JISC）がそれぞれ中心となって、所蔵資料のデジタル化というきわめて労の多い作業を国家規模で集中的に推進している。電子著作権問題はここでもまだ未解決である。エンド・ユーザーが無料で情報にアクセスすることを保証し、かつ情報提供の出版社側も十分採算のあうかたちが模索されているのだが、これにも国家的権威をもつ包括的な著作権料受け入れ機関への期待が大きい。その一方で分散化の動きも急ピッチである。インターネットの普及で情報の流れが図書館中心から利用者中心へとコペルニクスの転回が始まりつつある。インターネットはジグソーパズルとも見られる。分散した利用者が無意味な断片をかき集めて一枚の絵に仕上げるのを許す。こういう中での中心機関における電子サービスの主要コストは、獲得経費よりも所有経費に重心が移るといわれる。要員訓練、データ取扱いの集中化、ドキュメンテーション、各種支援業務等である。

本学としても学術情報のネットワークについては、運営管理の集中化とユーザー端末の活用という集中と分散の二面から精査しなければならないであろう。15世紀以来なれ親しんだ書籍形態が今後も活用されることは間違いないが、気象・作況のデータ、医学や考古学のデータも多くは電子的フォーマットでしか入手できないものも増えている。学問的世界で新たな電子情報通信パラダイムが巻き起こっているのである。